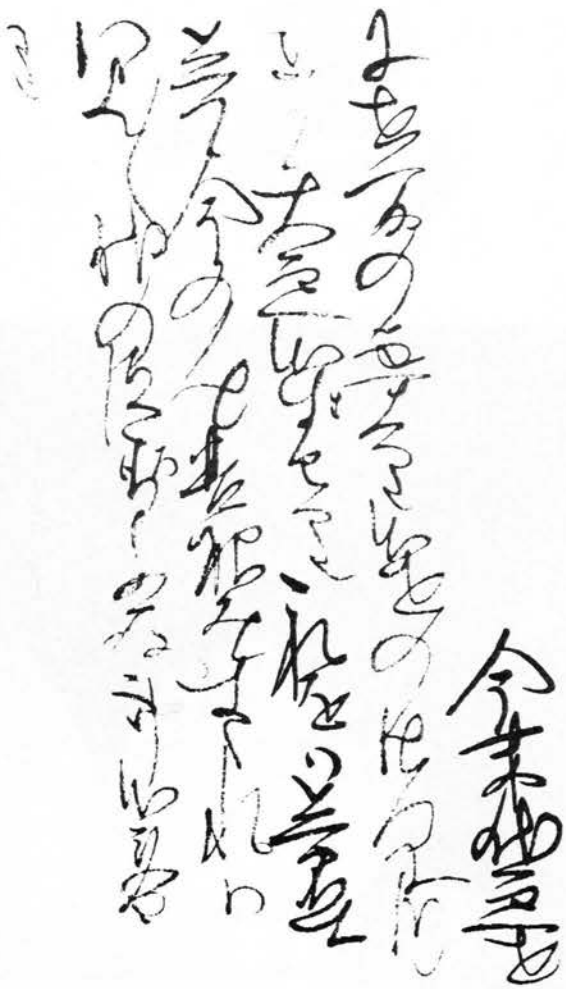
今月の御聖訓



今末代悪世

に世間の悪より出世の法門につきて大悪出生せり。これをばしらずして、今の人々善根をすすれば、いよいよ代のほろぶる事出来せり。

【滅劫御書　一四六六頁】

目　　次

今月の御聖訓
巻頭言……菅野憲道　1
講演「自分を生かす心とだめにする心」……菅野憲道　2
ちょっと寄り道㊴〈製品づくり〉……森田観道　8
【法華講総会一所感発表】
「すべてが変毒為薬」……小林燁代　9
読書案内『THA MAGIC POCKET—ふしぎな ポケット』……松田銘道　13
忘れられた総講頭」〔六〕……槻木守三　14
恵日だより……21
九月の行事　長月詠草

表紙写真撮影:松井義信氏　題字:立正安国論より拝写

巻頭言

仏法的世界と歴史的世界

菅野憲道

時間という概念を、われわれは、ちょうど川の流れのように絶え間なく流れていて、過ぎ去ってしまえば二度と還らぬものという、直線的な捉え方をしている。ところがインド仏教などにおいては、そうではない。川は久遠の昔から変ることなくそこにあるもので、次々に変化するけれども、川そのものは少しも変わらないと見る。それと同じように、時間というものも、本質的には円還的なものとして受け止められているのだという。

近代になって西洋の歴史教育がとりいれられ、合理的・実証的な学問が仏教学の世界にも入ってくることになった。そのため、仏教的宇宙観ともいうべき須彌山説はとうの昔に放棄され、いまでは釈尊の入滅年代や経典成立の研究から、末法説や、五時八教説までも歴史学的には否定されるにいたった。けれども、法華経に説かれた内容は、久遠実成の釈尊や地涌の菩薩、宝塔涌現の話など、もとより当時の仏教者の信仰世界を表現したものであって、けして歴史的現実世界に起こったものではない。もともと世界観や人間観の土台が違っていたのである。

日蓮大聖人の法華経の理解も、歴史学的な見地からいえば、当をえていないことになる。大聖人の思想・信仰も、御書において霊山直受とか久遠教主という表現を用いておられるのは、宗教的体験による仏法世界の話をされているのであって、それをただちに歴史的現実世界の出来事として云々するならば、狂人のそしりは免れないのである。戒壇思想にしても、現実に政治権力をうごかして歴史的世界に戒壇堂をつくると解釈すれば、矛盾と混乱が起こることは先刻実証ずみである。

歴史的世界におきた事実は、信・不信にかかわらず、共通の認識として社会に受け入れられるが、宗教的世界の事実は、信・不信によって異なるのである。

さていま、宗門の人々の陥っている錯誤は、本来「信心の二字におさまれり」といわれた戒壇本尊を、歴史的世界の存在（モノ）としてとらえているところにある。宗派としての伝承を歴史的事実として無批判に主張すれば、他宗他門からはその虚実を厳しく検証されるのは当然である。その結果、仏法的世界で語られていたことが、いつのまにか、世俗の次元にすりかわって、本尊とか仏という信仰的意義を見失うのである。

いったい本尊がホンモノであるとかニセモノであるというのは何をもっていうのか。宗祖日蓮大聖人の魂魄たる本尊とはどういう意味なのか。そろそろ学会教学の悪弊から脱皮して、ホンモノの本尊観を確立してもらいたいものである。これなくしてはホンモノの信心もない。

講演（要旨）

広宣寺法華講総会の砌

自分を生かす心とだめにする心

菅野憲道

《生きるということの意味》

本日は「自分を生かす心とだめにする心」と題しまして、お話し申し上げたいと思います。

人が生きるということはどういうことでしょうか。普通、よくお医者さんが言うような意味では、肉体的な生命が、呼吸して、物を食べて、毎日寝て起きて排泄するという、その繰り返しだけを生きているといいます。しかし、これだけでは「人生を生きている」とは言えず、動物や植物が生きているのと同じことであります。ですから「人として生きる」ということの中には、単に肉体が活動して、ただ食べて寝て起きて排泄するという生存のことではなくて、そこに明確に、人間としての自覚なり、意志や目的というものを持って生きていなければ、生きているということにならないのではないかと思います。

「生きる」の志村喬

生きるといえば、有名な黒沢明監督の映画「生きる」を思い出します。この映画は、俳優の志村喬が演じて非常に有名になった、黒沢映画のベスト3に入る名作といわれています。

♪命短し恋せよ乙女……。

の、「ゴンドラの歌」を口ずさみながら主人公が公園でブランコにのるシーンが印象に残る映画ですけれども、この映画のテーマは、今まで人生をぼんやりと流されて、まるでそこに石か草花でもあるような、マンネリ

そのものの日を送ってきた主人公が、ガンに冒されてあと半年の命ということを知った時から、突如として自分はこのままで死んでいいのだろうかという焦燥にかられることから始まります。そしていろいろ悩み苦しんで初めて自分の生き甲斐なり、目標なり、「人は何のために生きるのか」という答を手探りでみつけだす姿を描いたもので、志村喬が主人公の心の中までみごとに演じていて、非常に感銘を受ける映画です。

この映画を見た方も多いと思いますが、見てない方のために一つの例を上げて「生きる」意味を考えてみることにします。

よくいわれることですが、我われは豊かな生活を求めて生きています。豊かな生活をしたい、豊かな人生を送りたい。それで一生懸命に働いてお金をもうけて、いろんな物を身の回りに揃えるというようなことを、我われは戦後五十年間ひたすら努力してやってきたわけです。今やいろんな家財道具もあるし、便利な電気製品もある。そこそこ小さい家でも買えたし、あるいは小さなマンションにも住めるようになったのですけれども、本当に豊かな人生になったのだろうか。どうもここまできてみても本当に豊かになった気がしない。今自分は豊かな日々を送っているのだろうかと思うと、何かどうもおかしい、どっか足りないような気がするのです。その欲求不満が金銭欲とか物欲に向い、さらに新しい製品を買おうかというようになると、どうもこれは話がおかしいのです。

例えば、自分の人生を旅に例えますと、百万も二百万も支払って豪華なヨーロッパ一周旅行に行ったとします。毎日々々デラックスなホテルに泊まって空調のきいた部屋でおいしい料理を食べて、言われるとおりに絵はがきの名所を見物して帰ってくるような旅が、本当に豊かな旅といえるのかということです。

それとも、例えば無銭旅行、昔で言えば芭蕉のような、あるいは最近は、猿岩石というのが有名になりましたけれども、彼らのような旅はどうでしょうか。我われの世代ですと、東京オリンピックの頃、小田実という作家がアメリカ横断無銭旅行をして『何でも見てやろう』という本を書いて、これが話題になり、大勢の若者に影響を与えました。

かえって彼らのように、裸でよその国に飛び込んで、苦しいことやつらいことや楽しいことなどいろんなことを体験したり、いろんな出会いがあったり、またその土地で生活しているいろんな人間の姿を観察してくる。そういう旅行こそ、心に豊かなお土産を持って帰ることが出来るのではないでしょうか。

我われの人生も一つの旅ですから同じことではないかと思います。我われは外に向って豊かな物を求め、回りにいろんな物を集めて、自分が豊かになった気でいるけれども、本当はそれでは豊かな人生にはならないのだと思います。やはり自分の心の中に多くの宝を持っていて、自分の内なる世界を豊かにしていってこそ、本当の豊かな人生があると思うのです。

しかし「生きる」というだけならば、それは人間の生き甲斐とか人生哲学でありまして、どうもそれだけではもう一つ何か欠けているような気がするのです。本当の意味で「自分の人生はこれでいいのだろうか」、あるいは「死んで悔いなし」とする人生なのだろうかと考えると、そこにまた一つの疑問が残るのであります。

私はそういうことについて「生きる」という処から己れを「生かす」、あるいは己れを生かす処から人を「生かす」、モノを「生かす」という処まで行ってこそ、それが菩薩と人間の違いであり、そこに宗教心の必要な所以もあると考えています。

《己れを生かす法とは》

それはなぜかといいますと、まず生かすということを水差しで例えますと、その水差しを生かすには、しまっておいただけなら、何も生きてきません。これを役に立てるには、惜しまず使うという処からものが生きる、あるいは生かされるということがあると思います。

ところが残念なことに戦後の日本人は、この己れを生かすという方法がわからなくなってしまったようなのです。もともとは、「人はどのようにして生かされるのか」ということが判っていたのでしょうが、愚かしい戦争によって非常に悲惨な体験をしたものですから、世の中のために自分を犠牲にするということが、ばかばかしくなってしまい、自分が何かの犠牲になるということができない風潮になってしまったのだと思います。

野球などでも、本来自分一人でプレーしているわけではなく、一人はチーム全体のために頑張っていってこそ、自分も生かされてくるのです。たとえ完投目前で、あと一人アウトをとれば勝てると思っても「ピッチャー交代」と命ぜられたらいさぎよく引き下がってくるし、自分がホームランを打とうと思っていても、ここはバントだ、ここは犠牲フライだと命ぜられたら、素直に指示に従わなければいけません。各自がそれぞれに個人プレーに走ったら、結局それはみんなのためにもならないし、自分を生かすことにもならないのです。要するに、自分を捨ててみんなのために生きようとする、そのことがまた自分を生かすことであると、そういう道があったはずであります。

そして実際、幕末維新の頃など、自分の命を捨てて国事に奔走するような若者が大勢いたのです。坂本龍馬や西郷隆盛にしても、未だにそういう人たちが永く語り継がれているのは、みんな自己犠牲という、自分を捨てて生かすということを知っていた人たちだったからだと思うのです。

渡辺昇一『得する生き方損する生き方』

本来日本人は、犠牲的精神が美しいものであり、立派なものであるということは、誰でも知っていたのでしょうけれども、戦後は急速に忘れ去られてしまって、ほとんどの人が、損はしたくない、犠牲になりたくないというような、個人主義の風潮に染まってきたんだと思います。

最近、幸田露伴の『修省論』という本を渡部昇一氏が『得をする生き方・損をする生き方』という題で出版されたのを読みました。タイトルはあまり思わしくないのですけれども、現代

語訳でわかりやすく書かれております。その中にこういう一節が出てきます。

「文明史を飾っている光り輝く星たちはすべて犠牲者である。火炎の中や寒い水の中に飛び込んで、我が身を灰とし、我が血を氷となすことをいとわなかった人たちである。人類の歴史はこれらの人たちによって始めて意義を持つことが出来たのである。」

と。要するに、世の中というものは、医学でも科学でも芸術の世界でも、みな我が身を削って犠牲的精神を払って頑張ってきた人たちによって、世の中は進歩して来たということです。なるほど、それはその通りです。すべてのことは誰かが、皆んなのために、不幸な人のためにと頑張って努力した人がいたから、いまの安全で便利な社会が実現できたと思うのです。

ちなみにこの幸田露伴は、日蓮大聖人を深く信仰していた人です。だからこの人の本を読むといたる処に法華経や御書の影響が見られます。直接引用しなくとも、法華経の精神に裏付けられた考えであることがわかる箇所が多いのです。

とりわけ感心したことは、この犠牲ということについて、

「国家の興亡は、国家のために犠牲になってもいいという者の多少によって予知することが出来る。」

という箇所などです。要するに、その国にどれだけその国のため、未来のためにと思っている人たちがいるかによって、その国の盛衰は予知できるということです。実際その通りだと思いますが、これは一つの家庭でも、会社でもそうです。また一つの団体でも同じことではないでしょうか。自分のことは後回しにして頑張っている人がどれだけいるかによって、その集団も発展していくと思うのです。しかし今の日本には、そういう人たちが影をひそめてしまったのですから、おそらく衰退の道をたどることになるのでしょう。

《捨つる人こそ捨てぬなりけり》

ところで、誰でも犠牲的精神が美しいものであるのはわかっていながら、現実には自分が犠牲にはなりたくない、少しでも損をするのはいやだ、という処に大きな問題があると思います。

幸田露伴はその中で、犠牲ということに条件をつけております。というのは犠牲ということが、しばしばある思い上がった独裁者によって利用され、人々が犠牲になる場合があり、それから犠牲になる者も間違ったことに盲目的になって犠牲になるということは、いかにも愚かでつまらないことだとクギを刺しています。

だから最低限、次の三つが守られなければ、それは真の犠牲ではないというのです。すなわち一つは正しいことのために。一つは国家権力や組織に命ぜられてやるものではなく、自分の内発的な信念から起こるもの。それからもう一つは誰も他人の犠牲を受ける権利もないし、他人を犠牲にする権利もない、自分が犠牲的精神を発揮しても他人にそれを要求してはいけないといいます。その中の一部分を引きますと、

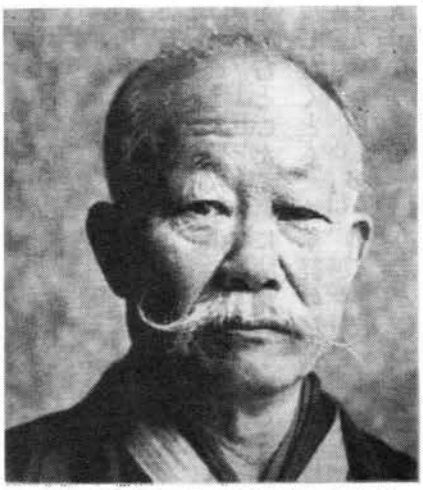
「真の犠牲者は、皆な自分の心の奥底の声に感じて動くのであって、耳元のラッパの音に動かされて身を挺するものではない。」

と書いております。まったくその通りで、こういう話はよくよ

く考えると、みんな仏法の話です。

すなわち御書の中に説かれた雪山童子の話、あるいは楽法梵志の話、あるいは提婆達多品の中に出てくる話、すなわちこの三千世界は菩薩として衆生の為に身命を捨てた処でないところは芥子ばかりもない、いたるところ釈尊が遠い過去から数限りなく衆生のために身命を捨ててきた場所である、というようなことと符合します。

そして大聖人ご自身、竜の口法難で示されたお姿こそ、まさしく我が身を犠牲にし、捨て石となって、何としてもこの法華経を弘めよう、そしてその功徳を父母・師匠や弟子檀那、さらにはすべての衆生に布施しようというものであったことはご承知の通りです。



御書に通ずることを書き記した露伴

もとより、南無妙法蓮華経ということは正法に身を任せるということであります。結局のところ我が身を仏様に布施する、自分が仏法のために犠牲になることを少しも厭わない、そういう心こそが、本当は我が身を助けるものであるということを知っていただきたいと思うのです。

こういう精神が、日蓮正宗には近代まで脈々と受け継がれて来たことは、例えば明治の日霑上人や日布上人などは、宗門が非常に衰退した時期にあった方ですが、その時期に書かれた御消息などを見るとよくわかります。それは不惜身命ということを、古い歌を引かれて書かれたものですが、

身を捨てぬ人は　自ずと捨てるなり
　捨つる人こそ　捨てぬなりけり

と、自分の身が惜しいといって、自分の身を捨てない人は、本当は知らず知らずに我が身をつまらぬことで捨ててしまうことになる、一生空しく過ごしてしまうんだということであり、逆に「捨つる人こそ捨てぬなりけり」と、我が身を省みずに人のためや仏法のために一生懸命やるという人こそ本当は自分を一番大切にする人だ……、そういう歌です。さらにこのことについて解釈を加えて、

「不惜身命にいたし候えばこそ、自然に身も相立ち申すべく候。身を惜しみ候えば自然に身を捨て候。」

と。たしかに、当時の霑師や布師などは、維新前後のたいへんな時代ですから、大石寺が借金だらけの中を、御信徒から受けた御供養のお金をすべて宗門のために使い、自身は至極貧しい生活にあまんじられ、それこそ老体にむち打ってご奉公されたのです。

世間でも「身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ」ということわざがありますが、我われも、少しでも世の中のためにいい種をまく、あるいは自分のことより人のためを思う、そういう精神に立った時に、はじめて己れも周りも生きるということを考えなければならないと思います。

《誰もが持っている菩薩の心》

しかし、自分も今日から早速、犠牲的精神を発揮してやって

みようと思っても、実際にはなかなかできるものではないし、長続きしません。必ず苦しむことにもなるし、失敗することにもなるでしょう。しかし、そういう精神を忘れずに、三年、五年、七年と頑張っていったならば、必ずそこから自分の境界が変わってくるのではないかと、私は思っています。

御書の中にも、

「凡夫は志ざしと申す文字を心へて仏になり候なり。志ざしと申すはなに事ぞと、委細にかんがへて候へば、観心の法門なり。観心の法門と申すはなに事ぞとたづね候へば、ただ一つきて候衣を法華経にまいらせ候が、身のかわをはぐにて候ぞ。」（「白米一俵御書」全集一五九六頁）

と仰せられて、仏法のためにわが身を法華経にまかせなさい。後ろ向きの臆病な気持ちを捨てて、何としても志を遂げなさいと申されています。

勿論、現実には、我われは末法の愚かな凡夫ですから、自分が犠牲になるのは嫌だという強い執着がありますが、そうかといってそういう気持ちしかないのかというと、本当は誰でも犠牲になってもいいという気持ちはあるのです。

私は僧侶ですから、いろんなお弔いにお参りに行きます。その中でいつも感ずることは、子供さんが亡くなった時にお父さんお母さんも悲しむのですが、お祖母さんがひどく悲しむということがあります。お婆さんはこれから生きていても、あと十年か二十年ぐらいしか生きられないし、役にも立たず生きていても、いずれは死んでしまう。できることなら孫に変わって自分が死んでやりたい、と皆んなそう言われます。そのように誰でも子供や孫のためになると犠牲的情神を発揮して、我が身も惜しまないという生命を持っているのですが、それが菩薩の心です。その菩薩の心をさらに広げてすべての子供が、皆んな自分の子供、孫である。それから正しい仏法のため、正しい道理のため、皆んなが幸福になれる真理のため、そういう処まで広げていったならば、それが本当の法華経の地涌の菩薩の精神であろうと思うのです。

正法のために命を捨てるというのが、爾前・迹門の菩薩と本門の菩薩の違いではないかと思うのです。

結局、自分を生かす心というのは、世のため正法のためという心、すなわちこの大聖人の仏法の信心に通ずるということであり、自分の心をダメにするのは、貪欲、愚癡、瞋恚の心、慢心、エゴの心、そういうものが自分をダメにする心です。

正信覚醒運動ということも、これが成就できるかどうかということは、我われ一人ひとりが捨て石になる覚悟で信行学に精進して行く以外にないと考えています。

皆様が、自分の内なる地涌の菩薩の声を感じとって、世のため法のため身を惜しまずに頑張ろうという、本当の不惜身命の精神に立つならば、我が家、我が身はいうにおよばず、お寺も、法華講も盤石であると思います。

そして真の志を持った法華講の同志が、しっかり結束して精進していくならば、宗門も、それからこの日本も、必ず立ち直れる日が来るとの強い確信を持ってご精進願いたいと思います。

南無妙法蓮華経

（了）

ちょっと寄り道 ㊴

製品づくり

伯耆の里　もりたかんどう

明け方のはげしい雨で目が覚めた。ついでだからと、頼まれていた原稿を仕上げようと机に向う。パソコンの電源を入れ、ステレオのアンプの電源を入れる。スピーカーからは昨日から聴いているブランデンブルク協奏曲第四番がエンドレスで流れる。弦の音が、あるときは繊細に、あるときは重厚に響く。フルートと弦とチェンバロの掛け合いがつづく。私のゼイタクなひとときである。

このアンプを買ってから、まだ日は浅い。正直なところこのアンプから音がでるまでは心配だった。というのもリサイクルショップで買った25年前の管球式アンプだからである。手頃なパソコンはないかと、ときどきこの店をのぞいてみるが、ある日、このアンプが入り口正面の一番目につくところにおいてあった。一目でラックスのＳＱ３８ＦＤ MK2とわかった。音楽ファンには垂涎の名機、その最終型で、よくこんなものが出たと思うほどの掘り出し物である。

数日たっても売れていなかったのでホッとした。「いつかはＳＱ３８」の夢がかない、ケーブルをつないでスイッチを入れる。真空管がボーっと薄赤くなる。聞き慣れている曲をあれこれかけて試聴する。一つひとつの音の輪郭がはっきりしていて、いままでの音とちがうのがわかった。25年たっても美しい音を出すその寿命の長さには感心する。

ところが、いいことは続かないものか、アンプを買って喜んだその日、数ヶ月前に買ったパソコンが故障した。コンパクトで性能もよかったから気に入っていたのだが、とつぜん電源が入らなくなった。メーカーのサポートセンターによると、どうやら電源ユニットの交換をしなければいけないらしい。いままで何台もパソコンをあつかってきたが、こんなに早く故障したのは初めてである。

たしかに、このところどこのメーカーもコストを切りつめるためか、製品づくりはていねいとはいえない。いままでパソコンの背面に用意されていたコンセントも消えて久しいし、プリンタやＭＯやＺＩＰなどの周辺機器には電源スイッチすら省いてあるものがある。ユーザーの不便さよりコスト優先らしい。各部品の品質も以前と比べるとあきらかに落ちてきている。キーボードなどもすぐに汚れがつくようになった。

はからずも、古いものが新しいものよりすぐれている例証を目の当たりにした一日であった。

（大安寺住職）

【法華講総会 所感発表】

すべてが変毒為薬

緑丘地区 小林燁代

こんにちは。小林でございます。

私が入信いたしましたのは、昭和三十一年の一月十五日、高校生の時に、父が、うちは分家で何もないから、何か拠り所になるものをしようじゃないかというわけで、私もだんご三兄弟だったんですけども、私を頭に姉弟三人と、五人で、東京中野の昭倫寺というところで御授戒を受けました。それで、連れあいも折伏しなければいけないということで、折伏いたしまして、昭和三十九年東京オリンピックの年に、小梅の常泉寺で結婚式を挙げまして、主人の勤めの関係で大阪に参りました。ちょうどこの五月で結婚三十五周年なりました。

その間に、昭和四十一年、丙午（ひのえうま）の年に長男が誕生いたしまして、出産を私の実家でいたしましたので、御授戒は私と一緒の昭倫寺で受けました。そして七五三とか成人式は、こちらの源立寺でやらせていただきまして、特別なことはできませんけれども、お正月の元日の勤行だけは必ず家族でこちらに伺っておりました。

大学を出て、就職で東京に参りました長男と、ある時電話で、

「結婚しようと思うの。」

「どなたと。」

「お母さん知らない人。」

「彼女連れていきますから、御授戒できるようにお寺の方お願いします。」

と。何もいえなかったんですね。それだけが条件でしたから。

それで、彼女も無事御授戒を受けて、平成六年の十二月二十五日、こちらで結婚式をしていただきました。

その下に、九つ空いて五十年に長女が生まれました。これは大阪で生まれたものですから、御授戒も七五三も、こちらでしていただいて、成人式の時は東京の大学へ行っておりまして、帰れないかもしれないといっておりましたんですけれど、夜行バスに乗りまして、成人式にぎりぎりで帰って参りまして、こちらの本堂でたった一人の成人式をしていただきました。

彼女が大学に入学したのは平成七年で、一月十五・六日とセンター試験を受けまして、明日から二次の勉強だという翌朝、家が半分潰れちゃったんですね。

本当にいろんなことがあって、東京の大学に行きたいといった時に、パパは絶対入らないだろうと思って、頭に「東京」の付く大学だったら行っていいと許可をいたしまして、一所懸命センター試験を頑張っていたんですけれども、東京のあの大学だけは二次を頑張らなければいけませんのに、とても勉強する状態で

はなくて、その辺狡かったんですけれども、何かパパと交渉いたしまして、

「センターで何とか入れる国立だったらいい？」

ということで、パパを口説き落としたようでした。でも、女の子ですし、私学もいくつか受けましたが、おかげさまで入学金を納める段階で、

「うちは被災者なんです。」

というと、水戸黄門の印籠ではないのですが、

「はあ、そうですか。大変でしたねえ。国立が受かるまで待ちましょう。」

と、三つの学校がそう言って下さいましたが、お陰様で国立に合格いたしました。

その間私にできることは、普段はなまくら信心をしておりますが、とにかく親は祈ることしかできないのですから、御本尊様どうぞ娘をお願いしますと、私の得意のお願いしますお題目をあげました。

この娘が、東京でいろいろ勉強して、親に嘘をついてしまったということを気にしていたのでしょうか。東京と付いた学校に行かなければいけないと思いまして、その大学にある社会情報研究所を受けて、受かることができまして、大学三・四年は二つ学校に行きました。「受験の時より頑張ったよ。」と自分でも言っておりました。

小林燁代さん

社会情報研究所というのは、大学の教授ではなくて、いろんな一般の優秀な方達が講義にみえるそうで、そこですてきな女性のジャーナリストに出会ってしまって、学校だけで帰ってくると言っていたのに、ジャーナリストになりたいなどと、とんでもないことを言い出しました。

私はびっくりしてしまいましたが、娘の願いを叶えてやりたいと思い、同窓会名簿を全部繰りまして、新聞社や報道関係の仕事にお勤めの方で偉くなっている方に片っ端から電話をいたしまして、娘がその方面の仕事に就きたいと思っているので、一度会ってそれがどういう仕事か本音で教えてやって下さい、といってお願いしました。

やはり古い友だちというのはありがたいもので、皆んな「いいよ。」といって下さって、娘を連れて東京へ行っていろんな方に、辛い話などをしていただきましたが、どうしても娘はそれになりたい、頑張るというので、マスコミ関係の受験をいたしました。

面接試験では、なぜマスコミ関係を志望したかを聞かれたそうですが、阪神大震災で自分自身が被災した体験と、その時の様子をテレビや新聞で報道するのを見たことがきっかけで、自分の目と心でニュースを伝えたいと申したそうで、彼女にとっても被災の辛い体験が、就職試験では変毒為薬となったように思います。

また、娘は私が三十八歳の子でしたから、親が年をとっていてとっても損だ、躾からなにから全部違う。私のお友だちお母さんみたいなこと言わない、などとだいぶん反抗していたのですが、面接試験を受けると大体重役さんがパパ前後ぐらいの方で、ちっとも重役が怖くなかった、親が年とってて良かったなんて初めて言ってくれました。

おかげさまでNHKとTBSと両方受かりまして、本人もお題目をあげてさんざん悩んだ末に、TBSの方に、今年の四月から就職いたしましたが、いいジャーナリストになってくれればいいなあ、と思っております。

ところで私は、十五年ほど前に痛めた頸椎のリハビリのために、医者から社交ダンスを勧められ、青春時代を思い出して、社交ダンスを始めることにしたのですが、ただ、四十年前と今では大変事情が違っておりまして、なんか私の理想として考えていた、あの素敵なのじゃないなと思ったものですから、自分で会を作っておりました。月一回第二土曜日の夜に、パーティーをしているのですが、この会が、今年でちょうど十周年になるんですね。

娘の就職のことで、四十年前のお友だちに会った時に、たまたま十周年になることが話題になったのですが、その方が、

「十周年記念に、何かやるの。」

「十周年記念をやろうと思うんだけど……。」

「じゃ、周防呼べば。」

と、さりげなく言われたんですね。あの「シャルウィー・ダンス」の周防監督のことなんですね。今や世界の周防になってしまって、簡単に呼べる人ではないと思っていましたが、

「紹介状書くから、あなたも手紙を書きなさい。」

っていわれて、一所懸命お題目をあげて、周防さんにお手紙を書いたら、本当に来ていただける運びになりまして、備後町（大阪市中央区）の綿業倶楽部で周防さんをお迎えして、無事十周年も過ごすことができました。

これらのことを私流にいろいろ考えてみて、この信心をして変毒為薬とよく口には申しますけれども、やはりそれが実感として、これがそうなんだな、と感じたことが娘の受験の時です。家は潰れた、みんな壊れちゃった、命に別状はなかったけれど、すごい辛い思いをしました。でもそのおかげで、入学金は全部免除になりましたし、一年間授業料も免除になりましたし、なかなかは入れないというお茶の水の国際寮に入れていただいて、変な話ですけれども、六畳一間の部屋をベッドもデスクも付いて一ヶ月三千円。そんなこと考えられないことですから、とても辛い思いが、よかったなということになりました。

また、私が自分の会を何とか立派にしたい、メンバーの方が喜んで下さる会にしたい、十周年どうしよう等と思いつつも、娘のためを思って一所懸命あげたお題目が、私の利益になってしまったことには「不求自得」ということを感じました。本当に皆んなが喜んでくれて、マスコミも雑誌社も取材に来るような会ができてしまった、よかったなあ、これが長

年信心していた功徳かな、なんて、とても恥ずかしいことですけれども、ちらっと考えました。

そういう個人にとっていいことがあると、黙っていられませんし、お友だちも、

「この就職の大変な時に、何もなくてよくできたわねえ、どうして？」

と、向うから聞いていらっしゃいますし、

「何で周防さん呼べちゃったの。」

「それはね……。」

ということで、折伏なんてもんじゃなくて、私はもう「摂受かな。」って思うぐらいですけれども、「実はね……」って、お話しする時はどうしてもご本尊様の話をせざるを得ないわけです。長年信心していて、皆んなが羨ましがることができちゃった。これはお題目の力だなっていうことで、とにかくその人に正しいお題目を唱えさせてあげたいと、折伏に近いことはやっております。

なかなか立派なことはできず、自分の幸せを中心に考えているような自分です。でも、もっと目を外に向けると、今世界ではコソボ情勢があんなに大変ですよね。民族の問題かもしれないけれど、やはり宗教が間違っているからじゃないか、若い外国の戦士が駆り出される時に、ジハード（聖戦）という名のものとに、彼らは命を捧げて戦っています。そして小さな子供もお年寄りも、あんな不幸な目に遭っているのは、これは全部宗教が間違っているからだと思います。

そして、国内に目を向ければ、絶対大丈夫と思った銀行が次々と破綻して、壊れていっていますね。もう本当に政治家でも実業家でもどうすることもできないわけです。これをどうすることができるというのは、三大秘法の御本尊様を戴いている私たち正宗の信者しか、これを救う道はないんじゃないかと思うんです。

私には何の力もありませんけれども、立派な御本尊様を戴いている以上、少しでもお題目を唱えて、今この末法の世の中を何とかしていくのは、小渕さんじゃないわけですよね。私たちなんだと思ってやっていける、なんて幸せなんだろうと思います。

これからも、まず自分の足元を見て、しっかり自行化他の信心に励んでいきたいと思っております。どうも失礼します。

【長月詠草】

〔橋本 圓子〕

離れ住む　子よりの送金　有難し

ケヤハウスに入る　八十路の吾は

ケヤハウスの　食堂の末席に　かしこまり

転校生のごと　黙し座しいる

〔故橋本 義一〕

ベルに起こされ　ナース二人が　便の世話

「お尻上げて」と　天使の声もて

CT腹部輪切りの写真よく解る

これが指令所・胆嚢・胆石

本書のタイトル「THA MAGIC POCKET」は、まど・みちお氏の「ぞうさん」とともに代表的な詩の一つである「ふしぎな ポケット」の英訳。

まど・みちお氏の詩の中から十四点を美智子皇后が選び、自ら英訳されたものを収録した英語と日本語の対訳の絵本詩集で、第一集「どうぶつたち—THA ANIMALS」に続く第二集。

第一集は、一九九二年アメリカと日本で出版され、たちまち世界中に大きな共感と感動を与え、同時にまど・みちおの世界を素直に伝えたとの高い評価を受けた。なかでもアンデルセン賞の審査員達は、

「まるで、まどさんが自分で最初から英語で書いたものを読んでいるようだ」

と絶賛した。それはやがてまど・みちお氏が日本人として初めてアンデルセン賞作家賞を受ける大きなきっかけともなった。

第二集を手にすると、国際アンデルセン賞を受けた安野光雄氏の素朴ながらもあたたかみのある絵を眺めつつ、英訳を楽しむことができる。あちこちに聞き覚えのあるやさしい単語がじつに行儀よく並んでいる。

英語がまるっきり苦手だろうが、そんなことはどうってことない。たちまちに英語の世界に引きずり込まれ、昔習った単語の記憶をたどりつつも、英語の美しい響きに心もすっと溶け込んでいく感じだ。この英訳ならば日本語から感じとる詩の世界と同じものを感じとることができるだろう、そういう想いを強く懐く。それほど見事な出来映えだ。それは米国学校図書館誌が、

「より身近かな英語に置き換えるかわりに日本語の擬声を新鮮に保持しながら、なお柔軟かつ端麗なことばで謡うことの出来る見事な英語力」

と評したように、まど・みちお氏の世界がそのまま綴られている。

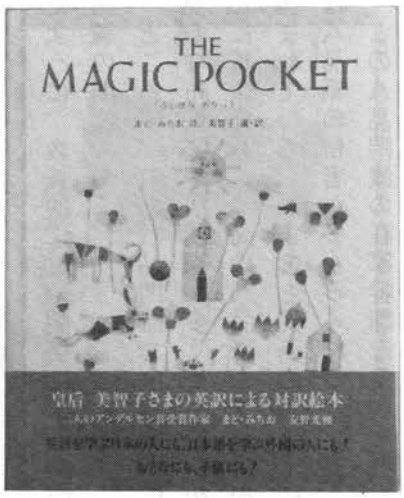
十四編の中で、私は「おはよう おやすみ」の英訳が特に気に入った。というのも、普段気が付かないでいる大事なことを、そこから発見できた。

私たちは、一日の始まりと終わりを「おはよう」「おやすみ」という言葉で表現している。それは自分が家族とともに生きているという感謝の表れでもあり、また太陽や月といった宇宙そのものと生きていることを実感する言葉でもある。

表現する言葉こそ違え、地球に住むあらゆる人たちが「おはよう」「おやすみ」と挨拶を繰り返す。それは親から子への、いのちといのちのかけ声ともなっている。英訳にはそんなビッグプレゼントが隠されていた。

読書案内

松田銘道

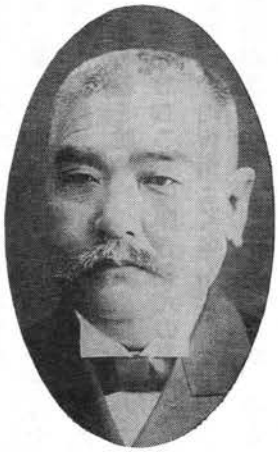


美智子選・英訳

『THA MAGIC POCKET
—ふしぎなポケット』

すえもりブックス
定価 二〇〇〇円

【荒木清勇居士略伝】



忘れられた総講頭〔六〕

槻木守三

＊東奔西走の日々

伐木事件やら護法会議でたびたび本山に依頼され、奔走した明治十六年は、荒木にとって忙しい年だったようである。

というのは、このころ法華宗八品門流の大講長らとの法論がおこり、その応答のために寧日もなかったのである。

八品門流とは室町時代に精進院日隆が開いた一派で、大聖人の仏法は上行所伝の本門八品にあると主唱、一致派（身延等）を天台与同の謗法と批判し、本迹勝劣義を掲げたことにはじまる。尼崎本興寺・京都本能寺は日隆開基の本寺であり、富士派とは細草檀林を共同で運営していたように、教義的に近い関係にある本門主義の門流である。

ところで、この八品門流では幕末期に熱心な布教家や法門家が多くでて、さかんに折伏弘教し、高松八品講や仏立講が生まれている。いまでも関西の法華宗には八品系の信者が多くみられる。

この八品門流の在家幹部と荒木清勇との問答が起こったのには次のような伏線があった。

それは明治十五年十二月、すでに、能勢講中中島栄太郎・池田講中秦利一郎両人が八品門徒と京都亀岡で行き会って法論対決となり、その際に八品門流の全国大講頭岩佐信行・武内寿山の両人から、荒木清勇及び牧野浄実を対論者として指名してきて、正邪の決着をつけようといってきたのであった。

その十二月八日、荒木・牧野両人は、源立寺講中の秦利一郎・新田伊三郎をともなって亀岡の指定された家に行ってみたのだが、約束の時間をすぎても相手方は一向に出て来る気配がなく、待ちぼうけを喰わされてしまった。

翌日、京都の武内宅に急使をたて、本人の出張を促したところ、あにはからんや言を左右にして出てこようとしない。相手から持ちかけてきた法論に、すっぽかされては収まらない。そこで荒木らは帰路、京都に迂回して武内宅を訪れたと

ころ、留守との返事でとりつくしまもない。やむなく今度は大講頭の岩佐宅に回ってみると、「それは武内が勝手にもちかけたこと、自分は預かりしらない。」との返事、そのうえ、「自分は教学もなく、老齢で法論などとんでもない。」というので、やむなく武内への伝言を託し、翌十二月十日ようやく帰阪した。結局、八品門徒の違約によって荒木らは三日間も無駄足をさせられたのである。

そこに翌明治十六年五月中旬、丹波篠山の講員本田久助が所用で大阪湊橋の旅宿今井藤三郎方に泊ったことから法論の件が再燃した。

本田久助は、もともと篠山洞光寺（曹洞宗）の檀徒で祈祷師のようなことをやっていたが、明治十年十月に源立寺の石井政七および広正房から教化を受けて帰伏、その後講中を組織してこの年に東本荘教会（興福寺）を開き、後に自らも剃髪して霑師の弟子となり、初代住職（道久房）となった人物である。けして法義に明るくはないが、信心の人とは三代住職となった照平房の弁である。

道久房日樹大徳（本田久助）

この時は本田久助が教会所を設立する前後で、仏具購入にでも上阪した時のことと思われる。旅館の主人がたまたま八品門徒で講長をつとめるほど熱心な信者だったから、話題のおもむくところ、いきおい富士派と八品派の法論に発展。甲論乙駁たがいに譲らず、議論は夜更けに及んでも決着がつかず、日を改めて正邪を決することを約して分かれた。そこで本田は帰途荒木清勇を訪ねて、応援を請うたのであった。

荒木は翌日、牧野講頭・畠山副講頭とともに、湊橋の今井家を訪ねると、八品側も小林惣講長なる幹部が待機しており、挨拶もそこそこに、すぐ法談がはじまった。

荒木は当初彼らと交互に討論するつもりでいたようだが、小林らの主張は、荒木が先に富士派の法義について演べ、それを聞いたうえで質問するという虫の良いものだった。

荒木は前年、武内らに逃げられた経緯もあったためか、あっさりとその主張をいれて口火をきった。

まず御書を引いて本宗の本尊論を論じ八品文上の義を破折にかかった。すると話の途中で「質問」「質問」とさえぎり、論題は一向に進まない。そのうち八品派の信徒も続々集まって場内は騒々しくなってきたので、この日はいったん打ち切

りとした。

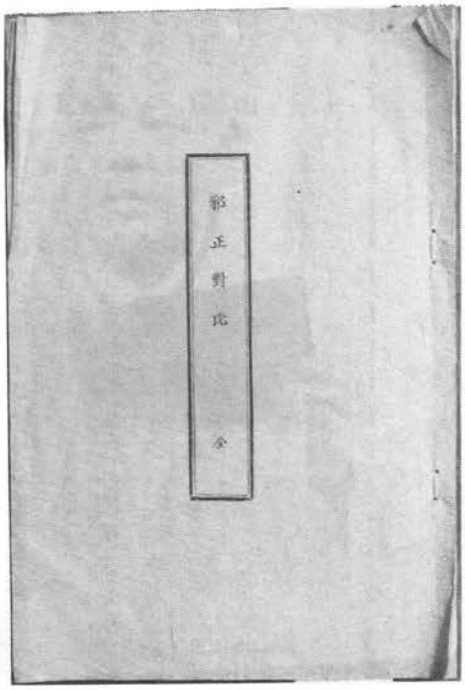
ついで六月二十一日、牧野講頭の経営する静観楼で、彼らを招いて演説会を行うこととした。その日は八品門徒が約二十名集まってきたが、その中にはかつて亀岡で逃走をきめこんだ京都の武内大講長も応援に出てきていた。どうやら、その後富士門流との論戦にそなえて研究を怠らなかったらしい。

荒木の演説がはじまると、彼らはまたもや富士の立義について見当違いの非難を浴びせ、御書の科段を混乱して質問するなど、衆をたのんでの不規則発言に終始し、結局彼らを帰伏させるにはいたらなかった。

ついで七月六日にも再び静観楼で対論を試みたが、ここでも同じような質問を繰り返すに止まり、いつまでも主張は平行線をたどるばかりであった。

現代でも「法論」とか「公場対決」ということを時々耳にするが、実のところ、この方法はあまり有効とはいえない。というのは、口頭による議論をかみ合わせ、公正な論議をつくすことはほとんど困難なことである。たいていは、はじめから自己主張を繰り返すばかりで、相手の意見に聞く耳をもたない。都合の悪い批判にはわざと枝道に入ったり、論点をすりかえ、得意分野の議論で相手をやりこめることが戦法となる。

あげくのはてに、声の大きい方、口数や人数（味方）の多い方、ハッタリやかけひきのうまい方、宣伝力の大きな方が「勝った、勝った」と騒ぐことになる。教義のことなど深く知らない観客から見ると、宣伝合戦で勝ったものが勝者のように見えるからなおさらである。



問答の全容を記した『邪正対比』

この場合も演説と質疑応答ではらちがあかず、荒木清勇はこれを打ち切りとし、つぎに文書によるやりとりに切りかえてみて、八月十五日まで四往復の論戦がおこなわれた。

その内容は、おおむね文底下種と八品所顕の主張を戦わせようというものだが、これも議論の入り口のところで平行線をたどるばかりで、いたずらに時日を費やすのであった。

問答の潮時とみた荒木は、当初の約束通り、問答の全容を印刷に付し、江湖の識者の判断に委ねることにした。

『邪正対比』として出版されたこの時の往復文書は、富士宗学要集にも収録されているが、まだ三十三才だった荒木清勇の法門的素養が、どのような水準に達していたかを、よく伝えている。

法論といい、著述といい、荒木清勇の日常の裏に、人に数倍する精進があったことが思われる。

＊分離独立運動と八山会議

明治九年三月に日蓮宗勝劣派から分離して日蓮宗興門派となった日興門下は、

八本山（大石寺・要法寺・北山本門寺・西山本門寺・保田妙本寺・小泉久遠寺・妙蓮寺・伊豆実成寺）の連合体として各山対等の協議によって運営されていた。

興門派管長は、輪番ということで当初要法寺日貫が務め、興門派大教院は二本榎の上行院（西山末）にあった。

ところが、永年にわたる各山の確執といい、教義や伝統における微妙な違いといい、同門といっても、呉越同舟の様相であった。ことに大石寺の場合は、自山を総本山として、管長はその貫首をあてるべしとの主張であるから、各山対等の立場を主張する七山とはしばしば不協和音を生ずることとなった。

分離独立運動は明治十五年六月、護法会議に先だって、一山評議の上、隠尊の盛師を代理とし、塔中総代奥村日視をもって交渉を依頼した。そこで盛師らはまず興門派大教院の同意をとりつけたうえ、内務省に分離独立願を出願することとした。

しかしこの請願は、政府も各山も容易に認めるはずもなかった。

翌十六年四月になって再び大教院に分離独立の請願書を提出して七山の承認印を求め、さらに同十七年六月大教院に八山会議を開催した際、大石寺は強く自山の正嫡を主張して分離独立の承認をせまった。そこで七山側もこれを了承し拠出基金の割り戻しなど、着々その手続きに入った。

ところが明治十七年八月十一日になって、太政官の布達第十九号がでて状況は一変した。これは勅任官であった教導職を廃止し、各宗派において管長を定め、宗制寺法に基づいて寺院住職の任免等の扱いをその管長に委任するというものであった。政府の宗教政策が、基本的には各宗の自治に委ねる方向に転換したのである。しかし、その第一条に、「各宗派妄りに分合を唱え、或は宗派の間に争論を為すべからず。」とあって、既成教団の際限ない分派を制止しようとする意図がうかがえた。

これにより、大石寺側は時期に利あらずとみて急遽、分離独立請願を見合わせとすることとし、一件取下げと和睦を申し入れたのであった。七山側では面白かろうはずはない。ここでも確執は深まっていた。

かくして再び諸山の列に連なった大石寺は、同十七年十月太政官布達に基づいた宗制制定と管長選定の八山会議に出席。この会議の席上、大石寺こそ総本山たること、管長は大石寺貫首が就任すべきことを主張し、輪番制に異を唱えたため、会議は紛糾、そのあげく、大石寺・西山本門寺と六山に分裂して、内務省に分派願を提出することに決定した。しかしこれも役所から却下されてしまった。

つづいて翌十八年四月、引き続き興門派宗制制定の八山会議が開かれたが、再々にわたって会議は紛糾、双方協議の結果、またもや分派決定となり、こんどは大石寺単独と七山に分離の請願を、両者連署をもって提出した。ところが、また不認可となってしまい、このあと大石寺の財政事情もあって、分離独立の件は沙汰やみとなってしまった。

荒木清勇の覚書によれば、明治十七年九月の上京は、伐木事件及び私用を兼ねての上京であったが、たまたま八山会議の件が起こったため、布師および役僧等の依頼もあり、大阪講中の代表として分

離独立に尽力することになったという。

「……及ばずながら微力をふるい、日数三十日ばかりの間は実に寝食をも顧みず、かれこれへ奔走し、尽力斡旋したるといえども、私の専断に非ず、御記録』⑰四五五頁）

とある。

荒木清勇が奔走したのは、主として内務省の役人に対する陳情等であったと思われるが、明治十七年十月の八山会議では、西山本門寺が大石寺に与しているから、各山代理の役僧に対し、荒木も直接交渉をしたことも考えられる。また、荒木がこの件でも、運動費の一切を自弁でまかなっていたことに注目しなくてはならない。

布師（第五十五世日布上人）

ところで、この分離独立運動は必ずしも、一門の総意というわけではなかったようである。というのは、霑師の自伝、明治十五年六月十日の記録には、

「……盛師昨夜下谷へ御着の由にて来臨あり。けだし大教院分離出願の為めなりと。予このことを予て聞き、その山主師（貫首）を始め奉り役員中のご依頼を受け、このことに従事したり。……中略……これが周旋上についての饗応とその費用はなかなか三十円や五十円にあらざる事は、御山主様始め役員諸君の熟知せらること……」（『諸

不賛成なるをもって昨日至急便をもって両師へ異見申し上げしも、早や御出京とは余りのお手回しと竊かに歎息し、付添人古川八十郎氏を以ってお止め申せしも、甲斐なくついに何の益もなく、大負債を醸せる基いとなりしなり」（『日霑履歴』研教二四－七四九頁）

このように霑師はむしろ分離独立に反対の立場であったことが分かる。さらに末寺でも慈温・田村慈淳らが護法会議の際に「建議書」（明治十六年十月）を提出し、分離独立に異義を唱えている(注1)。

ところで、「隠尊」とは、隠居した貫首の尊称で、血脈相承の不断に供えるためとして、つねに当職の上人が隠居して「ご隠尊」と称していた。ふつう隠尊が亡くなると、貫首は隠居して学頭に猊座を譲ることが江戸中期頃からの慣例となっていた。

とりわけ明治七年～十年には当職日布上人の先住である隠尊として、英師・霑師・盛師・胤師の四人も隠尊上人がいたほどで、それは、ある意味でこの時期の大石寺経営の困難さを物語るものともいえる。

霑師と盛師の関係について付言すれば、これより先、慶応元年（一八六五）の祝融によって客殿・六壺・大坊が焼失、それよりさき大衆（僧徒）との間に不和をきたしていた当職の盛師が、憤激した大衆の追及にいたたまれず、書き置きを残して出奔してしまうという事件があった。盛師はその後行方不明となってしまうが、数ヶ月後に栃木・信行寺に蟄居しているのが分かった。

大石寺は火災にあった上、突然貫首の座が空席となってしまい、大衆は困惑し窮地に陥ったが、当座は隠尊の英師が法務をつとめ、やがて霑師が懇請された。霑師は先住としての責任を感じてやむなく再住、諸堂の再建と失地回復にあたったのであった。さらにその四年後、辛苦の末に堂宇の復興を果たし、あとを胤師に譲って、再び隠退した。

身軽になった霑師はこれよりのち一、二の供を連れて全国を行脚、弘通の旅に出て、本山の行政にはなるべく口を出さないようにしていたのであった。

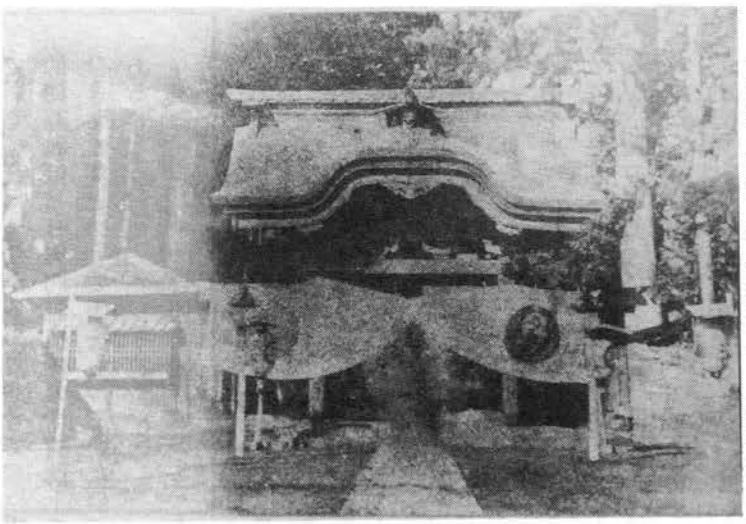
このような関係から、霑尊はむしろ別格の大御所的存在として、この時期にはやや敬遠されがちであったため、分離独立問題や護法会議では直接諮問に預かることがなかったのである。

しかるに、伐木事件や護法会議・分離独立問題で、当職や役僧からのさしたる諮問もなく、その上盛師や当局者が思いのままに行動して、再び多くの負債を抱えかねないとの懸念から、深く憂慮していたのであった。

盛師は出奔事件の沈静化した後に謝罪を申し入れて和解がなり、明治五年には胤師の代理として一本寺独立請願に従事したけれども徒労に終わり、ついで明治七年から常泉寺住職に就いていた。思うに、この分離独立運動は、多分に盛師の名誉挽回の気分があったようである。

たまたま明治十七年当時、運動に奔走していた盛師の消息が雪山文庫に残っている。

「今般下谷（常在寺）を以ってまたぞろ金願に付き登山いたし候際、愚翰を呈し候……中略……当月中には連印調い申すべく、来月中願出で、十二月には許可相成り候は必定、ここにこまることは宗号願いにて、是れにて手間取り申すべしと存ぜられ候。しかし想像は来二、三月頃は必定也。なにとぞ仏造りて魂入れずと申すごとく、今百五十円を是非下谷へ持たせ、帰寺候はねば、伊勢徳方の融通とまり候……中略……何とぞ地券にてできずば抵当品にても願い上げたき位に候。いま内務役人、教院等、ゆるめ候てはあいならざる次第に立ち至り候……」（『諸記



遠忌法要に飾り付けた鬼門

録』⑥三七六頁）

このように、成算のない分離独立運動（注2）のため、すでに相当の金銭を消費したうえ、本山の寺地や什器を質に入れても、あと百五十円を工作費として送ってもらいたい旨の記述が見える。

こうした計画性のない浪費が、大石寺を財政破綻という危地に陥れる結果となり、老齢の霑師がその負債の尻拭いのため、再び引っぱり出される状況をつくってしまったのであった。（つづく）

（注1）

住本寺蔵『建議書』

「最近伝聞するに、すでに分離独立の請願を内務省に提出しているとのこと。これは我われの希望しないところである。何となれば前に述べたように、いまは日興門下が一致協力して布教に力を入れるべき時で、不協和の点があれば、宗開両祖の御意に基づいて議論を尽くして解決していくべきである。これまで門下が離散し、区々になっている点も尽力して統一するように主張し、和合協力していくべき時であるのに、何故にかくなる行動にでるのか不審である。またその請願書中、『末寺並びに信徒の要望によりやむをえずして分離を請願する……』との文言は承知しがたいことである。さらにまた請願書に某師が末寺代表として署名しているが、我われはそのようなことを委任したことはない」（意訳）

（注2）

分離独立について評すれば、富士門流六百年の歴史は、各本山がときに反目し、時に対立しながらも、基本的には各山固有の伝統を保持しつつ、同門として協調してきた事実もあり、時間をかけて融和策を模索する道もあったはずである。

教学的にみれば、興門派は、保田日我師や石山日寛師の本因下種三宝が主流であり、要法寺日辰師の造仏読誦論は少数であった。また、要法寺系の東北地方寺院や岩見の諸寺院、さらには北山末であった讃岐法華寺等は引き続き大石寺と通用関係があり、霑尊などしばしば巡教に招かれることさえ珍しくなかった。

すなわち、興門派内の融和を心がけていけば、やがて有師・要師・我師・寛師の教学で日興門下も統一されていく見込みはあった。

しかし、大石寺が血脈相承と戒壇本尊の権威によって、自山だけの正統を主張をすれば、かえって他山も我れこそ正嫡門流の主張をする。そこに末寺や檀信徒の奪い合いが生じるから、なお一層対立感情がエスカレートすることになる……。

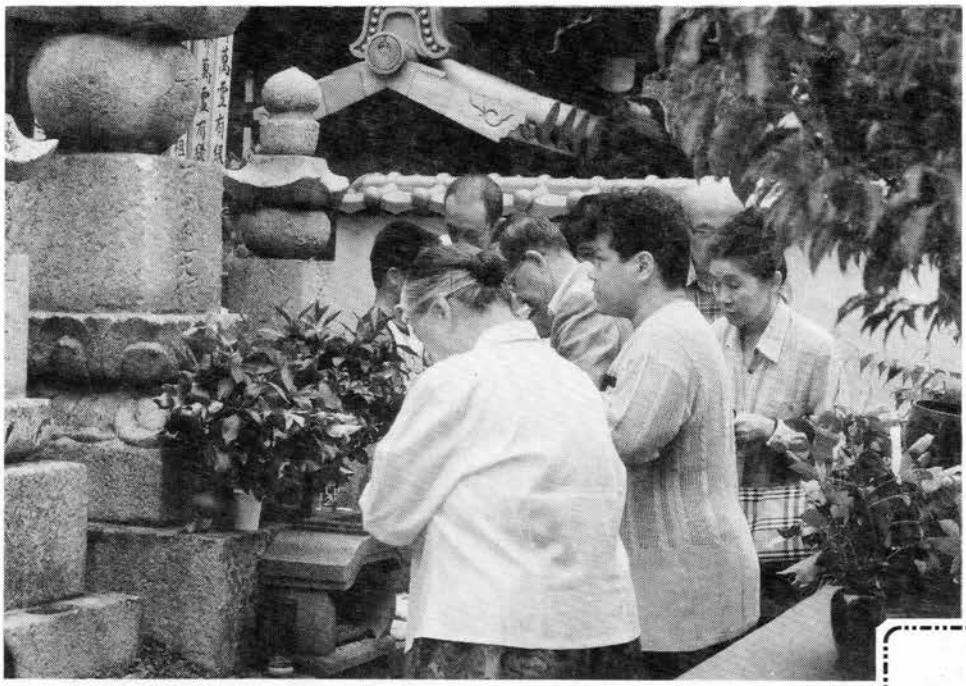
このように大石寺の優位性のみを主張することは、かえって日興門下の主導的立場を放棄し、門下全体が分裂・拡散していくことにつながるのであって、巨視的にみれば、日興門流全体の地盤沈下をひきおこすという要因をもっていたのである。

実際、戦時中の合同問題にさいし、本門宗（七山）の心ある人々が、日蓮正宗との合同を模索しつつも、日蓮宗（身延）との合同の道しか見いだせなかったことは、いまに大きな禍根となって残っている。

日興門下全体の見地に立つとき、大石寺教団に排他性、狭量さがなかったかどうか、日興門下の総本山と称するなら、他山を助けて正法のもとに共に栄えることをめざすような、興門の祖山にふさわしい抱擁力があったかどうか問われなければならないであろう。

封建時代の残滓を引きずったまま、いつまでも興門諸山に対立的かつ否定的に対処しているようでは、日興門流の真の展望はひらけないのではなかろうか。

恵日だより



盂蘭盆会法要終了後、三師塔前での読経

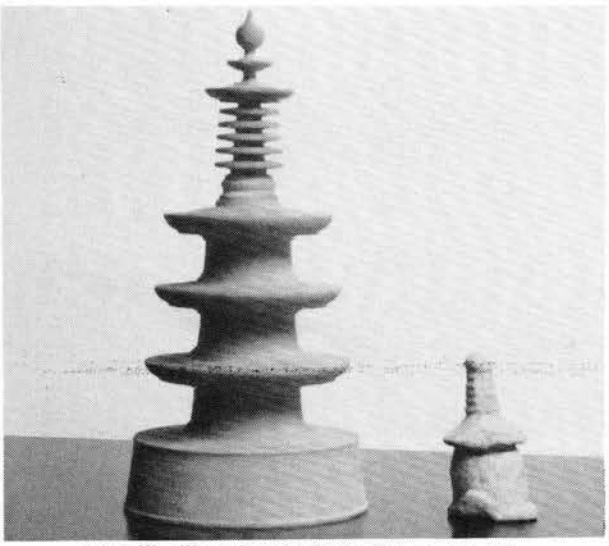
盂蘭盆会法要

八月十五日（日）午後一時

朝から小雨が降ったり、止んだりして、蒸し暑いお盆の中日となった。塔婆の申し込みも、檀信徒各位のご協力で、事前に申し込みがなされて、受付も混乱することなく、午後一時に本堂内に出仕鈴が、打ち鳴らされて法要は始まった。

ご住職の説法では、奈良時代に追福作善を目的として、木製小型で作られた轆轤（ろくろ）びきの供養塔、「百万塔」を披露され、宝塔と塔婆の原義などを説明されて、追善供養の大切さを説かれた。

三師塔の墓参が終り、裏手墓地の歴代墓の読経が始まるころには、それまで小憩していた雨が、また降り出して、境内には傘の花が咲き乱れた。



百万塔：塔の中には経文が入っている

【訃報】

〔服部地区〕

寿峰院妙正信女　八月七日寂

俗名　伊東ミネ之霊　行年八十八歳

この度、右の方がお亡くなりになられました。

謹んでご冥福をお祈りします。

九月の行事

一　日（水）　午後二時　お経日
五　日（日）　午前八時　講中勤行会・幹事会
七　日（火）　午後二時　広基寺お講
十二日（日）　午後一時　お講・御難会・役員会
十三日（月）　午後一時　お講
二十三日（木）　午後一時　秋季彼岸会法要
二十六日（日）　午後二時　法華経講義

※九月一日の継命新聞の発送は『宝塚・川西』が担当です。
※十月一日の継命新聞の発送は『旭丘・緑丘』が担当です。

今月の宅お講

十一日（土）　午後一時半　庄内地区（谷垣良一宅）
十七日（金）　午後一時半　宝塚地区（吉田瑛子宅）
二十五日（土）　午後一時半　服部地区（平井たえ宅）

※宅お講の申し込みは、源立寺までお願いします
締め切りは、毎月二十日です。

『恵日』の購読を希望される方は、左の口座に郵便振替にて購読料（年間二〇〇〇円（含送料））を払い込み下さい。

加入者名　源立寺法華講
口座番号　00930-5-14366

恵日
平成十一年九月号　通巻五十五号
平成十一年九月一日発行
編集兼発行人　菅野憲道
発行　恵日編集室
〒563-0057　池田市槻木町一-一〇　源立寺内
TEL（〇七二七）五一-三一三五
E-Mail：genn@wombat.or.jp
購読料　年間二〇〇〇円（含送料）
〒振替　加入者名　源立寺法華講
口座番号　00930-5-14366

恵日　九月号　通巻五五号　平成十一年九月一日発行（毎月一回一日発行）　編集兼発行人　菅野憲道　発行所　〒563-0057　池田市槻木町一-一〇　購読料　年間二〇〇〇円（含送料）